

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04736

研究課題名（和文）感性化の方法としてのフィードバック鑑賞と鑑賞体験モデル（模式図）の確立

研究課題名（英文）Feedback-Focused Art Appreciation as a Method of Sensitizing and the Establishment of a Model (Schema) for the Art Viewing Experience

研究代表者

立原 慶一（TACHIHARA, Yoshikazu）

宮城教育大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：10136369

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は鑑賞のあり方をめぐる方法論を新たに開発し、構築するべくその有効性を実践的に検証しようとするものである。とくに感性化の方法として「フィードバック鑑賞」が提案される。参考作品や模造作品を介在させ、さらには作品成立の根拠として文化依存性を踏まえて、改めて鑑賞に臨む方法である。ここでポイントとなるのは、本絵へフィードバックさせることで、美的体験が探索的な形で新たに追加される。反転効果によって、造形的特徴の感性的把握と最終的な主題の感受に、生徒を立ち向かわせることができる。その有効性を申請者が開発した評価法で検証することで、感性重視型の鑑賞体験モデルがここに確立された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

鑑賞論の有効性を検証するためには、当該活動の効果が信頼性の高い方法によって吟味されなければならない。それは第一に調査対象とした青少年の数量的条件、第二に調査項目の妥当性、第三にそこに現れた能力を序列化する手法の信憑性、などの課題に配慮する必要がある。申請者はこの課題に対して、学習指導要領における鑑賞論を批判的に考察することと、それに基づく教育実践の改善を往還的に繰り返すことによって、普遍妥当な評価のあり方を模索してきた。研究成果として、鑑賞体験観及び能力観の核心を見定め、それを切り口とする評価法を確立することができた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to develop and construct new methodologies around ways of art appreciation, by examining in a practical manner the validity of those methodologies. In particular, “feedback-focused art appreciation” is offered as a method of sensitization. This method approaches the viewing of art in a new way by employing the likes of reference artworks and imitations as intermediaries, and taking into account cultural dependence as a basis for creation of works. The key point here is the addition of new aesthetic experience, in an exploratory form, by feeding back viewing of the intermediary works into the original picture. Students can be encouraged to confront their sensory grasp of the design properties of the work, and sensing of its ultimate theme, via a reversal effect. By examining the validity of this using a method of appraisal developed by the applicant, a model for the art viewing experience with an emphasis on sensitivity was established here.

研究分野：美術教育学

キーワード：造形的特徴の感性的把握 主題の感受 美的感受 情意体験

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究における鑑賞法はアメリカの鑑賞論におけるような、知性主義的な傾向のものではない。そこでは作品世界の復元や解釈など、美術史的な探究のあり方を趣旨とする点に特徴がある。たとえばアビゲイル・ハウゼンにあって、美的秩序や個人の様式、作家の意図を直観的に把握する活動は、作品世界を復元し解釈するための視点を育てる、との因果関係が指摘されている。

(2) かけがえのない鑑賞体験は、そこで美術史探究のための方便としてしか扱われていない。またにニューヨーク近代美術館の元教育部長フィリップ・ヤノウィンの VTS (視覚的思考方略) にあっては、アートを介した対話が第一に子どもの思考力やコミュニケーション力、記述力を、第二に意味生成(構築)力を育成する、との立場に立つ。そこでは教師の役割が作品と鑑賞者をつなぐ、ファシリテーター(交通整理役・そそのかし役を担う人)へと変身している点で、改善されている。だが知性及び理性主義的な教育方針は、一切変わらない。

(3) それ以前に、現代アメリカを代表する心理学的芸術教育論の潮流を形づくっている、「芸術認知理論」そのものが発足当初から、美的感受や情意体験を考察の対象外にしてきたことで現在、理論と実践の両面ではこぼれが出始めている。この反省に立って欠落局面から再出発しよう、との意向がいまようやく打ち出されている。

(4) ところでキリスト教美術や日本伝統美術の場合にあって、知性主義的なあり方は一定の範囲内で確かに尊重されなければならないであろう。そこでは文化的なカテゴリーを参照しなければ、十全な鑑賞行為は成立しまい。前者では神学的教義や、図像学的教養が鑑賞のための道案内として必要とされる。また後者では、制作と鑑賞をめぐるさまざまな慣習的規約や制度が流派や時代ごとに存在するため、感性だけでは十全に対応しきれものではない。

(5) しかしこれらの美術は知性に根本的に基礎づけられた、社会科における「文化理解」の対象としてこそ妥当だ。筆者はこう考える。美術科のアイデンティティを見失わないようにするべく、当学問的教科にまかせる立場を採る。それとスタンスを異にするのが本研究の狙いとする。感性主義に基づく鑑賞のあり方である。感性化を方法とすることによって、美的感受や情意体験の活性化が期待されてくる。それでは美的体験は具体的にどのような形でなされるのであろうか。それは知覚された造形的特徴を形容語で述語づけることによって成立する。

2. 研究の目的

(1) 本研究は鑑賞のあり方をめぐる方法論を新たに開発し、構築するべくその有効性を実践的に検証しようとするものである。とくに感性化の方法として「フィードバック鑑賞」が提案される。それは視点を変えて本絵を再度、鑑賞する方法の意味で使う。参考作品や模造作品を介在させ、さらには作品成立の根拠として文化依存性を踏まえて、改めて鑑賞に臨む方法である。ここでポイントとなるのは、本絵へフィードバックさせることで、美的体験が探索的な形で新たに追加される。反転効果によって、造形的特徴の感性的把握と最終的な主題(作者の心情や意図)の感受に、生徒を立ち向かわせることができる。当該鑑賞法の題材例をできるだけ数多く考案し、実際に試みる。その有効性を申請者が開発した評価法で検証することで、感性重視型の鑑賞体験モデル(模式図)がここに確立されるのである。

3. 研究の方法

(1) 美的能力の評価法には困難な問題が立ちだかる。鑑賞論の有効性を検証するためには、当該活動の効果が信頼性の高い方法によって吟味されなければならない。それは第一に調査対象とした青少年の数量的条件(ここで学校教育現場の存在意義が浮上する。本研究は宮城教育大学附属中学校で実践する)、第二に調査項目の妥当性、第三にそこに現れた能力を序列化する手法の信憑性、などの課題に答える必要がある。

(2) 筆者はこの課題に対して、これまで学習指導要領(以下、「要領」と略す)における鑑賞論を批判的に考察すること、それに基づく教育実践の改善を往還的に繰り返すことによって、普遍妥当な評価のあり方を模索してきた。とくに数多くの題材実践を前提として、「要領」へ帰還することで、評価をめぐる知見が深められてきた。

(3) 本研究で評価のための一次資料とは、鑑賞活動中に一定数の中学生によって記載された、ワークシートの中身だと提起したい。さらに記述内容のうち懸案の調査項目として、「感受」する体験及び能力が着目、選定される。それは作品に対する部分的及び全体的な印象感受のレベルではなく、造形的特徴を見据えそれから美的特性と主題を形容語で述語づけることによって達成される。鑑賞能力の序列化は、ワークシートに記された美的特性の感受回数をカウントするとともに、主題感受の成否を判別する。

(4) 本絵への、フィードバック鑑賞法の有効性を想定し実践的に検証する観点から、方法論的

類型（「初級としての主題感受力育成の類型」「中級としての洞察力育成の類型」「上級としての価値判断力育成の類型」以上3つ）ごとに実践効果をめざす。第一に、当該鑑賞法が生徒の鑑賞経験を多角的に充実させる、メカニズムを見極めることができる。第二に、彼らの鑑賞能力を構造的及び継起的に高める様相と、方法論的各類型におけるそれぞれの有効局面が明らかにされる。結果的には、各類型がそれぞれ独自性を発揮しうるような、鑑賞体験モデル（模式図）が確定される。

4. 研究成果

（1）本研究は、本絵へのフィードバック鑑賞法におけるスタイルのあらゆる実現可能性を網羅し、さらに体系性且つ階段性を睨んで題材実践する。それを踏まえた形で、全3類型における方法論の有効的特質と、それらの連携に関する効果的な活用のあり方を究明する。本研究は第一に、感性主義に基づく当該鑑賞法を新たに提案する点、第二にその有効性を検証する上で信頼性が高く、簡明な評価法を適用するところに、学術的な意義と特徴が認められよう。

（2）「要領」の鑑賞論は「主題感受」、を踏まえた「表し方の違いの洞察」、「美意識の是認・賞賛」が鑑賞体験の本質及び鑑賞能力の中核を形づくる基本的契機であることを、理論的な自覚はないものの示唆する。それは第一に、フィードバック鑑賞法を構造的に整序するための、原理的根拠になりうると思われる。第二に、上記三者間には「易」から「難」への階段性がある、と想定される。

（3）本研究では、三契機それぞれを現実的な習熟段階に、なぞらえる。かくて鑑賞体験の本質及び鑑賞能力の基本的契機を、心理的・精神的発達のステージに呼応させる。を初級方法論として中学1年生で試みた。を中級方法論として次の中学2年生で、を上級方法論として中学3年生で試行した。最終的にはそれを前提として、三者を効果的に統括し運用するような視座を抽出できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 立原慶一	4. 巻 23号
2. 論文標題 エドヴァルド・ムンク作『春』の鑑賞	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 芸術文化	6. 最初と最後の頁 81 - 92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立原慶一	4. 巻 51
2. 論文標題 ワリシー・カンディンスキー作『コンポジション』の鑑賞と抽象画の制作	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術教育学研究	6. 最初と最後の頁 209 - 216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立原慶一	4. 巻 40
2. 論文標題 美的感受、解釈、価値判断	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術教育学	6. 最初と最後の頁 255 - 267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立原慶一	4. 巻 22号
2. 論文標題 比較鑑賞法における美的感受、解釈、価値判断	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 芸術文化	6. 最初と最後の頁 97 - 106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立原慶一	4. 巻 50巻
2. 論文標題 「より良い鑑賞題材設定のあり方とは何か」の根拠を求めて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美術教育学研究	6. 最初と最後の頁 225 - 232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立原慶一	4. 巻 39号
2. 論文標題 鑑賞能力と主題感受の関わりを求めて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美術教育学	6. 最初と最後の頁 209-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 立原慶一
2. 発表標題 ワリシー・カンデンスキー作『コンポジション』の鑑賞と抽象画の制作
3. 学会等名 大学美術教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 立原慶一
2. 発表標題 エドヴァルド・ムンク作『春』の鑑賞
3. 学会等名 美術科教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 立原慶一
2. 発表標題 「より良い鑑賞題材設定のあり方とは何か」の根拠を求めて
3. 学会等名 大学美術教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 立原慶一
2. 発表標題 比較鑑賞法における美的感受、解釈、価値判断
3. 学会等名 美術科教育学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金子一夫編集、立原慶一ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学術研究出版	5. 総ページ数 233
3. 書名 美術教育学の歴史から	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----